

THE YOMIURI SHIMBUN

# 読賣新聞

2010年(平成22年)

10月24日 日曜日

## 花火 九つの冒瀆的な物語 FIREWORKS

アンジェラ・カーター著

星雲社 1400円

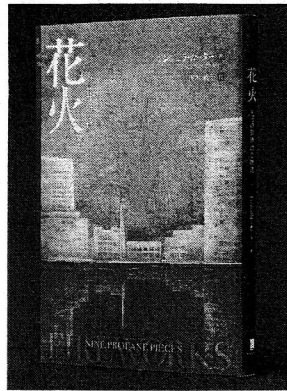
評・松山巖(評論家・作家)

読了後、久しぶりに濃密なエロティシズムを堪能した、という思いと、もはやこうした物語は現在の作家では綴ることが難しいのでは、という思いが交錯した。といってアンジェラ・カーターはけっして古い作家ではないのだが、1992年に五十一歳の若さで没している。

彼女は69年から二年ほど日本に滞在した。この短篇集の冒頭作は「日本の思い出」であり、作者自身を思わせる「私」と日本人の男との情交を描くが、背景の東京が、日本人の風俗が懐かしい。花火があり、薄暗い路地があり、人々の振る舞いには物悲しい節度がある。この異文化に戸惑いながらも理解しようとし、なお壁を感じる女の心理がエロティックな陰翳を生み、男の肌も、路地も、日本人の仕草も煌めかす。

荒涼とした日本の海岸に佇む女を描く「冬の微笑」も、戻ってきた東京で恋人を失い、行きずりの男とラブホテルに行く女の姿を追う「肉体と鏡」にしても、70年前後の日本の情景が様々な隠喩となつて、ユニークな文体と物語を生んでいる。作者自身もこの情景がやがて消えゆくことは悟っている。だからこそ一入儂く、儂さがエロティシズムとなり、切ない。

### 異邦人の儂さとエロス



◇Angela Carter—1940年、英国生まれ。92年に肺がんで死去。著書に『血染めの部屋』など。

他の六篇は直接には日本に無関係だが、「紫の上の情事」はタイトルといい、文楽の人形遣いをモチーフにしていることは明らかだし、他の短篇も異国異郷の香りに満ち、その上、近親相姦、両性具有者、殺人者の少女、テロリストたちと、死とエロスが、ときにグロテスクに、ときに繊細に、ときに残酷に紡ぎだされる。サブタイトル通り、いずれも「冒瀆的」だが、故澁澤龍彦が読んだら、さぞ喜んでに違いない。さらにいえば作者は、捨て身でこれらの物語を綴ったはずで、逃げ場もなく、行き場もなく、一瞬の花火のように、ただ小説を綴る他に術もない女をこれら短篇から思い浮かべた。それだけにひりひりと肌を刺すような淋しさが伝わり、一層の感興を加えている。榎本義子訳。